

オオウエ タカシ

大植 崇

健康科学部・講師
博士(看護学)／広島大学

主な研究業績

■大植崇・森山美知子・中谷隆(2010). 病棟に勤務する看護師において性差とジェンダー・タイプの違いがストレスとバーンアウトの知覚に影響するか. 広島大学保健学ジャーナル, 9(1), 7-14.

■Ohue, T., Moriyama, M., & Nakaya, T. (2011). Examination of a cognitive model of stress, burnout, and intention to resign for Japanese nurses. Japan Journal of Nursing Science, 8, 76-86.

■大植崇・森山美知子・中谷隆(2012). 看護師を対象としたATQ-R (Automatic Thoughts Questionnaire - Revised) 短縮版作成と信頼性・妥当性の検討. 広島大学保健学ジャーナル, 11(1), 20-28.

研究テーマ

看護師のバーンアウトと離職の意思に対する集団認知行動療法の有効性に関する研究

概要

我が国は、超高齢社会を迎え、今後ますます、少子高齢化は加速する。この社会問題に対して、看護師への期待は、ますます大きくなっている。そして、これに拍車をかけるように、複雑さを増し高度化する医療、加えて平均在院日数の短縮とともに迅速化した急性期医療の現場に付いていけず、早期に離職する看護師も増加している。看護職の離職率が高くなることは、人件費や新卒看護師のトレーニングに係る財政に影響するだけでなく、患者ケアの質にまで影響を及ぼすため、病院施設においても重大な問題として位置づけられている。離職行動は、仕事パフォーマンスや生産性に否定的な影響を及ぼし、職務を継続している看護師の組織コミットメントの低下やバーンアウトの増加にも影響し、追加の離職が起こるという悪循環を導く可能性が考えられる。この離職行動の背景には、バーンアウトがあるとされており、バーンアウトを低減させることが、離職率の低減、更には、患者への看護の質向上につながる可能性が考えられる。

先行研究では、バーンアウトには、認知の歪み（考え方のクセ）が影響していることが分かっており、その、認知の歪みを修正することで、バーンアウトや離職の意思を低減させる研究を勧めている。また、費用体制効果及び、ピアサポートの効果を考え、集団での認知行動療法を実施している。

応用分野

- 看護師のためのストレスマネジメントプログラムの開発
- 看護師のストレス要因に関する研究
- 看護師のストレスとバーンアウトにおけるジェンダー・タイプの影響に関する研究
- 看護師のストレスに関する性差の問題
- 看護学生のストレス要因に関する研究

共同研究へのニーズ

認知行動療法をもととしたプログラムを開発し、臨床経験年数3年目の看護師を対象に、1週間に1回（1回が90分）を合計3回実施している。今後、このプログラムが実践できるように、病院の看護師を対象とした教育プログラムを作成していく予定である。